

時代不同歌合

題

紅葉 秋月 忍恋

判者

青柳隆志

一番 紅葉 左勝 菅公

このたびは幣もとりあへず手向山紅葉の錦神のまにまに

右 貞信公

小倉山峰のもみぢ葉心あらばいまひとたびのみゆきまたなむ

(判詞)左は神歌、右は帝の御幸をよめる歌、いづれもめでたけれど、歌合のはじめには、なほ神歌こそはつきづきしからぬ。右は亭子院、延喜の帝のみゆきを待たるる歌なれば、いかで、菅公の負くべきかは。左をもちて勝ちとなす。

二番 秋月 左勝 千里

月見れば千々に物こそ悲しけれわが身一つの秋にはあらねど

右 顕輔

秋風にたなびく雲の絶え間よりもれいづる月の影のさやけさ

(判詞)左、右、ともに漢詩(からうた)にならひて作れるなれば、神韻缥缈として、いづれまされりとも思はず。しかはあれど、左は、心おもてにあらはれて、歌がら大きに、なほあはれ身にしむ心地のすれば、左勝。

三番 忍恋 左 敦忠

逢ひみての後の心にくらぶれば昔はものを思はざりけり

右勝 式子内親王

玉の緒よたえなばたえね長らへばしのぶることのよほりもぞする

(判詞)左は、逢ひて後の恋なれば、落題とはいひつべけれど、しのぶる恋を思ひくらべて詠みいだせるなれば、ゆかりなきにしもあらず。右歌、『源氏』柏木をよめるとは、さきの日本女子大学長、後藤祥子のさみの御説なれば、ゆめゆめおろそかにすべからず。右をもちて勝ちとなす。